CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

Rikkyo Psychological Research
2013, Vol. 55, 1-8

原　著

性別・年代からみた自伝的記憶の機能[1]

立教大学大学院現代心理学研究科　落合　　勉
千葉大学大学院融合科学研究科　竹田葉留美
立教大学現代心理学部　小口　孝司

Age and gender differences in the functions of autobiographical memory

Tsutomu Ochiai（Graduate School of Contemporary Psychology, Rikkyo University）,
Harumi Takeda（Graduate School of Advanced Integration Science, Chiba University）, and
Takashi Oguchi（College of Contemporary Psychology, Rikkyo University）

In this study, we investigate the three functions of autobiographical memory: “self,” “social,” and “directive.” The main purpose of this paper was to examine whether there are differences in TALE (Thinking About Life Experiences) questionnaire scores in terms of participants’ gender and age. The TALE questionnaire is a three-subscale measure, with each subscale assessing one of the above three functions of autobiographical memory. We conducted an online investigation with 400 men and women between 20-59 years of age living in a metropolitan area, and found that participants in their 20s used the self and directive functions more frequently than participants in their 40s and 50s. This indicates that autobiographical memory functions differ according to age.

Key words: autobiographical memory, TALE questionnaire, functions, gender difference, age difference

自伝的記憶は，“過去の自己に関わる情報の記憶”（佐藤，2008d）と定義される。自伝的記憶が認知心理学の一つのテーマとして注目を浴びるようになったのは1980年代以降である。しかしそのルーツは，1世紀以上さかのぼることができる（佐藤，2008a）。Cohen（1989 川口他訳 1992）が実験室の中の100年と記しているように，この間は，少数の例外を除いて，記憶のメカニズムの一般的法則に関してその理論的問題を解明することを目的として，Ebbinghaus（1885）による言語学習に関する無意味つづりを刺激とした実験をはじめ，刺激の提示回数や提示時間，提示時間間隔を操作するといった客観性の高い実験方法を用いた実験室研究に費やされてきた。すなわち，動物や人間の学習メカニズムを解明することに力を注いでおり，そのためには統制された刺激をもちいた厳密な実験状況のもとで研究することが当然であった（相良，2000）。

しかし，こうした流れは，1970年代後半に入って徐々に変化してきた（佐藤，2008c）。そのきっかけとなったのは，1976年の“記憶の実際的側面”に関する会議において，Urlic Neisser（1978）が行った“記憶：何が重要な問題か”というテーマの講演であり，その中でNeisserは，記憶研究は生態学的妥当性が必要であり，現実世界の自然な文脈の中で生じる行動に役立たねばならないと説いた（Cohen, 1989 川口他訳 1992）。日常記憶の研究がこれにより突然始まったわけではないが

[1] 本研究は，東洋大学21世紀ヒューマン・インタラクション・リサーチ・センター，ならびに科学研究費（基盤研究（C）23530829，研究代表者：小口孝司）から研究助成をいただきました。深く感謝いたします。

（19世紀後半から20世紀前半にかけてFrancis GaltonやFrederic Bartlettが自然文脈における記憶の多様で複雑な機能に関して問題提起をしてきている）（Cohen, 1989 川口他訳 1992），“日常記憶”あるいは“記憶の現実的な側面”といった表現が研究のキーワードとして認識されるようになり，1986年にはDavid C. Rubinにより*“Autobiographical Memory”*が編纂されることとなった。そしてそれからの20年間で自伝的記憶についての研究成果も急速に蓄積されてきた（佐藤，2008c）。

Bluck，Alea，Habermas，& Rubin（2005）は，人は単に容量や正確性を重視した情報処理装置ではなく，日常の文脈の中で情報を処理する生き物であることを考えると，このような膨大な人生の記憶をなぜ貯蔵しており，何のために使うのかという自伝的記憶の使用の視点から，自伝的記憶の機能面の研究が記憶の理解に有効であると指摘した。実際，自伝的記憶の機能についての数多くの研究がなされており，これまでの検討のなかで，自伝的記憶が担う機能は，自己（self）機能，社会（social）機能，方向づけ（directive）機能の三つに大きく分けられるとされている（Bluck, 2003）。

自己機能は，Bluck et al.（2005）が，多くの理論的な定式化（e.g., Bluck & Levine, 1998; Brewer, 1986）において，自己の連続という視点が強調されていると指摘しているように，自伝的記憶が，自己の連続性や一貫性を支えたり，望ましい自己像の維持を支えたりするために役立つ面を指している。自伝的記憶の自己機能は，過去と現在を対比させて成長を実感するのに役立つという面も考えられる（佐藤，2008b）。Cott（2005 鈴木訳 2007）が，記憶が消されたらまさにその人自身が消されてしまうと述べているように，自伝的記憶は自己の連続性やアイデンティティの基盤となっているのである。

社会機能は，自伝的記憶が対人関係の形成・維持に役立ち，対人関係やコミュニケーションにプラスの影響を及ぼすことを指している。社会的な結束の発達・維持・育成において，自伝的記憶の重要性が繰り返し指摘されてきた（Bluck et al., 2005）。たとえば，自己の経験を他者に開示することは，相手を楽しませたり，何かを教えたり，親密な関係を形成・維持するのに有効であるし，過去の出来事の詳細を語ることによって，その話の信頼性や真実性が高まり，コミュニケーションが豊かになることが指摘されている（佐藤，2008b）。

方向づけ機能は，自伝的記憶がさまざまな判断や行動の方向づけに役立つ面を指している。経験の集積である自伝的記憶を自己の価値観の確認や判断の根拠に使用したり，また，類似した過去の経験を想起したりすることで，現在の問題の解決や将来の計画策定に役立たせることも考えられる（佐藤，2008b）。さらに過去の経験が人を動機づけたり，態度形成に寄与したりするのも，一種の方向づけ機能であるとされる（佐藤，2008a）。

このように大きく三つに理論的に分類されてきた自伝的記憶の機能は，年代の変化によって影響を受けることが検討されてきた。たとえば，Cohen（1998）は，自伝的記憶の機能に対する加齢による効果について，高齢者においては，記憶を一般化することで自伝的記憶によって問題解決がなされる機能の重要性が減少し，この機能が十分に働かなくなると考えられるという。反対に，気分を制御したり自己概念を維持したりするために，個人内の機能がより一層重要になると推測されている。

また，田上（2009）は，自伝的記憶の方向づけ機能について，青年期と成人期を対比して，成人期以降になると自伝的記憶を現在の問題や疑問に利用することが少なくなること，すなわち方向づけ機能の性質が変化していく可能性を示唆した。さらにKusumi，Matsuda，& Sugimori（2010）は，消費広告過程における“なつかしさ（ノスタルジア広告）”に対する加齢の影響について検討し，年齢をとるにしたがってなつかしさが引き起こされたり，昔をなつかしんだりする傾向が上昇し，また，なつかしさを引き起こす傾向は30代から50代に向けて上昇することを示した。自伝的記憶の機能と年齢の変化の関係とは異なる観点からの研究であるが，年齢の変化が過去を想起する傾

向に影響を与えていることを明らかにした。以上の研究から自伝的記憶が担う機能は，人が加齢していくことによって，変化すると考えられる。

このような年代による変化について，越智（2008）は，従来から調査の対象が，大学生を成人の代表として取り扱っていたため，20代後半から50代，60代の日常記憶がどう変化していくかを問題にした研究はあまり行われていない。また，自伝的記憶研究においては，アイデンティティについて，青年心理学・臨床心理学的なアプローチからの研究が多かったが，記憶研究からのアプローチも不可欠であると述べている。

さらに，自伝的記憶における機能がどのように異なるかの観点からみると，性差の影響も考えられるであろう。たとえば，Wang & Conway（2004）は，質問紙調査で求めた20個の記憶の内容に関する内省的なコメントの数を比較し，アメリカおよび中国において，男性が女性よりも頻繁に記憶の内省を行うことを発見し，人生における自分自身の進歩を評価するため，男性がより多くの記憶を使用する傾向が反映されている可能性を指摘している。また，Kusumi et al.（2010）は，なつかしさを引き起こすCMについてのアンケートの結果，男女とも年をとるにしたがって，昔をなつかしむ傾向は強まるが，その傾向は男性が女性よりもやや強いことを示した。

以上の先行研究を踏まえて，本研究では，自伝的記憶の機能に焦点をあて，自伝的記憶が担う機能は年代によって異なるか，また異なる場合は，年代によってどのような機能が頻繁に使用されているかを検討する。先行研究から自伝的記憶が担う機能は年代によって異なること，また年代が上がるにつれて，方向づけ機能の重要性が低下し，自己機能の重要性が高まることが予測される。自伝的記憶の担う機能が性別によって異なるかをあわせて検討する。もし性別によって異なるとすれば，男女でどのような機能が使用されており重要であるかを検討する。女性より男性が頻繁に自伝的記憶のさまざまな機能を使用していると予測される。

方法

調査対象・調査期間ならびに手続き

首都圏在住の20歳代・30歳代・40歳代・50歳代の男女各50名，計400名を対象に，2010年10月から11月にかけて，Web調査会社に依頼して，調査を実施した。

分析対象

本稿では，この調査で得られたデータのうち，人生を振り返って考えたり話したりする全体的な傾向を評価するために調査票の導入として実施された二つの質問（“どのくらいの頻度で自分の人生をふりかえるか”，“どのくらいの頻度で自分の人生に起こったことを他の人に話すか”）の問いに，“全くしない”と回答した70名を除く330名を分析対象とした。二つの質問に“全くしない”と回答した70名を除いたのは，調査票で回答を求める各場面における過去を振り返って考えたり話したりする頻度に関する回答との一貫性をとるためであった。

年齢グループ別の内訳は，20歳から29歳グループ：男性32名，女性47名，30歳から39歳グループ：男性40名，女性39名，40歳から49歳グループ：男性38名，女性44名，50歳から59歳グループ：男性43名，女性47名であった。また，分析対象者の職業は，公務員18名（分析対象者に対する割合　5.45％，以下同様），自営業21名（6.36％），自由業13名（3.94％），会社員145名（合計43.94％――経営・役員9名：2.73％，管理職14名：4.24％，一般106名：32.12％，派遣・契約・嘱託16名：4.85％），学生9名（2.73％），専業主婦49名（14.85％），アルバイト・パート40名（12.12％），無職24名（7.27％），その他11名（3.33％）であった。

調査票

調査票は，個人属性と以下に述べるThinking About Life Experiences尺度（以下TALE尺度とする）により構成されていた。

個人属性　性別・年齢（20歳から59歳までを5歳ごとに区分）・職業・職種について調査した。

TALE尺度　Bluck et al.（2005）により作成されたTALE尺度を日本語に翻訳して使用した。この尺度は，理論的に展開されてきた自伝的記憶が果たす三つの大きな機能（方向づけ，自己，社会）を評定するため，自伝的記憶の機能に関する理論的論文において使用された項目の中から，方向づけ，自己，社会の各機能を代表する項目を選出し，自伝的記憶を何に使用しているかを尋ねる28項目（方向づけ機能10項目，自己機能10項目，社会機能8項目）から構成される尺度である。Websterの回想機能尺度（Reminiscence Functions Scale（Webster & McCall，1999））との収束的妥当性が確認されている。“私は，・・・というときに，人生や人生のある時期について，振り返ったり話したりする”というかたちで提示される。たとえば，具体的な項目は，自己機能については“自分が以前と同じ人間だろうかということに関心があるとき”，“自分が以前とどう変わったのか理解したいとき”，社会機能については“過去に同じような経験をした人と話して気分がよくなりたいとき”，“自己紹介したり，自分についてもっと話したりしたいとき”，方向づけ機能については“将来の目標を考えるとき”，“過去の失敗から学びたいとき”などである。回答は，想起の頻度を“全くない”（1点）から“非常に頻繁にある”（6点）までの6件法で求めた。二つの導入となる質問（“人生について振り返る頻度”と“これまで起こったことを他の人に話す頻度”）に答えた後で実施された。

結果

TALE尺度の因子構造の確認

フロア効果が見られた2項目，さらに因子負荷量が0.35未満の2項目及び因子間に重複して出現した7項目を削除し，残った17項目に対して最尤法・プロマックス回転による因子分析を実施した。固有値の変化は，9.91，1.24，1.14であり，回転前の累積寄与率は68.27％であった。回転後の結果をTable 1に示す。

第1因子は“方向づけ機能因子”，第2因子は“社会機能因子”，第3因子は“自己機能因子”と命名した。さらに，Cronbachのα係数は，“方向づけ機能因子”が$\alpha = .93$，“社会機能因子”が$\alpha = .87$，“自己機能因子”が$\alpha = .88$であり，いずれも高い信頼性を示した。

また因子間相関は，“方向づけ機能因子”と“社会機能因子”の間が$r = .72$，“方向づけ機能因子”と“自己機能因子”の間が$r = .71$，“社会機能因子”と“自己機能因子”の間が$r = .69$という相関が認められ，高い正の相関関係がみられた。

自伝的記憶の機能の年代差・性差

TALE尺度において自伝的記憶の三つの機能に対応する因子が抽出されることが確認されたため，抽出された因子の下位尺度得点（平均項目得点）を用いて，自伝的記憶の機能について年代および性別による影響を検討した。

年代と性別を独立変数として自伝的記憶の各機能を従属変数とする4×2の2要因分散分析を行った。年齢は，20歳から59歳までの5歳刻みの8個の年齢グループを10歳刻みの20歳代・30歳代・40歳代・50歳代の4年代にまとめた上で分析を行った。10歳刻みの年代別の対象数は，20歳代79名（男性32名，女性47名），30歳代79名（男性40名，女性39名），40歳代82名（男性38名，女性44名），50歳代90名（男性62名，女性28名）であった。各年代別男性女性別に自伝的記憶における機能を示す各因子の得点（平均項目得点）の平均および分散分析の結果をTable 2に示す。

方向づけ機能については，年代の主効果（$F(3, 322) = 3.44, p < .05$）が認められ，年代間で方向づけ機能を使用する頻度が異なるということが示された。性別の主効果および年代と性別の交互作用は有意ではなかった（順に，$F(1, 322) = 0.39$, *n. s.*, $F(3, 322) = 1.71$, *n. s.*）。

自己機能については，年代の主効果（$F(3, 322) = 4.08, p < .05$）が認められ，年代間で自己機能を使用する頻度が異なることが示された。有意な性別の主効果および交互作用は認められなかった（順に，$F(1, 322) = 0.01$, *n. s.*, $F(3, 322) = 1.22$, *n. s.*）。

Table 1

TALE尺度の因子分析結果（最尤法，プロマックス回転，n = 330）

項目番号・項目		平均	(*SD*)	因子負荷量 第1因子 方向づけ機能	第2因子 社会機能	第3因子 自己機能	因子抽出後の共通性
第1因子：方向づけ機能（α =. 93）							
Q3	将来の目標を考える時	2.40	(1.23)	.93	-.07	-.09	.67
Q2	将来に向けて計画を作りたい時	2.40	(1.23)	.91	.00	-.10	.70
Q6	人生の選択が必要だが，どの選択肢を選ぶか不確かな時	2.57	(1.24)	.71	-.03	.12	.61
Q10	現在の問題をもっとよく理解したい時	2.62	(1.29)	.65	.09	.18	.74
Q4	課題に直面して，自分に自信を得たい時	2.36	(1.20)	.62	.13	.13	.67
Q9	どうしてよいか分からないので，他の人が過去にくれたアドバイスを思い出すため	2.47	(1.25)	.55	.09	.17	.56
Q7	問題に対する解決法を探している時	3.04	(1.30)	.54	-.05	.25	.49
Q19	落ち込んでいて気分をよくしたい時	2.51	(1.26)	.45	.28	.01	.47
Q16	自分の信念や価値観が変化したか気になる時	2.30	(1.18)	.44	.13	.24	.54
第2因子：社会機能（α =. 87）							
Q21	過去に同じような経験をした人と話して気分が良くなりたい時	2.53	(1.22)	.15	.82	-.13	.72
Q22	自分自身の同じような経験を話して，相手をいい気分にさせたい時	2.58	(1.26)	-.18	.78	.17	.61
Q25	友人と古い記憶を共有して友情を深めたい時	2.73	(1.30)	.20	.73	-.18	.58
Q28	自分の過去の経験を話すことで誰かを手助けしたい時	2.76	(1.22)	-.07	.68	.18	.58
Q23	自己紹介したり，自分についてもっと話したい時	2.56	(1.21)	.01	.60	.13	.50
第3因子：自己機能（α =. 88）							
Q5	過去の失敗から学びたい時	2.82	(1.26)	-.03	-.05	.98	.85
Q1	起きてしまった悪いことについて考えるとそれから何か教訓を学べると感じる時	2.71	(1.27)	-.03	.15	.82	.82
Q18	その後に起こったことを考慮して，過去の出来事を再解釈したい時	2.54	(1.30)	.24	-.02	.55	.53
Q14	自分が以前とどう変わったのか理解したい時	2.42	(1.26)	.18	.00	.54	.47
回転後の負荷量平方和				8.41	7.52	7.44	
因子相関行列				因子1	因子2	因子3	
	因子1			－	.72	.71	
	因子2				－	.69	
	因子3					－	

Table 2

年代・性別の分散分析結果（平均項目得点による）

		20歳代 (n=79)	30歳代 (n=79)	40歳代 (n=82)	50歳代 (n=90)	分散分析の結果（F値）		
		M	*M*	*M*	*M*	年代	性別	交互作用
方向づけ機能	男性	2.83	2.41	2.51	2.23	3.44*	0.39	1.71
	女性	2.77	2.71	2.24	2.52			
社会機能	男性	2.88	2.70	2.66	2.38	2.48	0.08	0.73
	女性	2.83	2.71	2.39	2.56			
自己機能	男性	3.05	2.39	2.60	2.47	4.08*	0.01	1.22
	女性	2.93	2.79	2.41	2.43			

*p<.05

なお，社会機能については，年代および性別の交互作用，性別の主効果ならびに年代の主効果は認められなかった（順に，F (3, 322) = 0.73, *n. s.*, F (1, 322) = 0.09, *n. s.*, F (3, 322) =2.48, *n. s.*)。

年代の主効果が5％水準で有意となった方向づけ機能と自己機能について，Tukey法による多重比較を行った。結果をFigure 1に示す。方向づけ機能・自己機能ともに，20歳代と40歳代，20歳

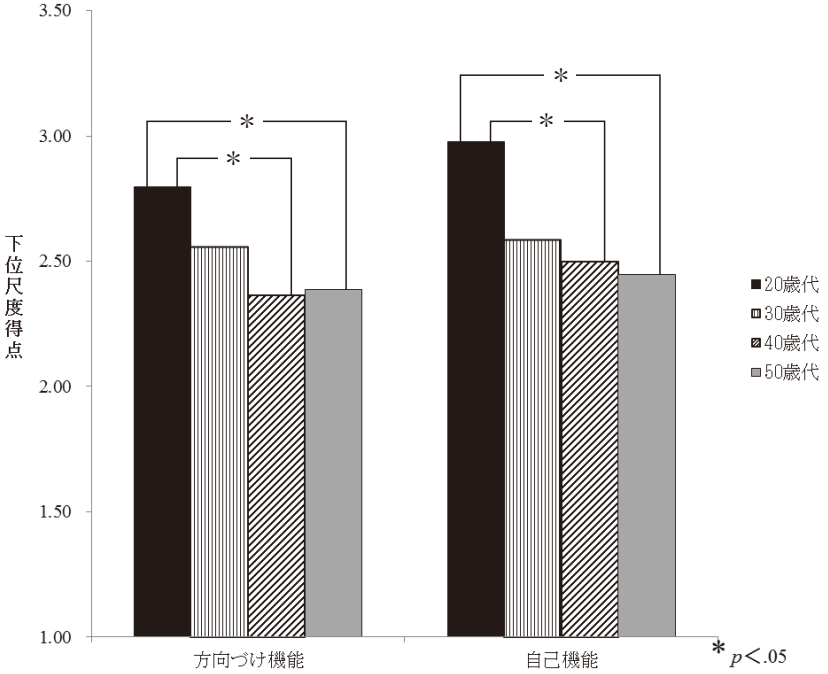

Figure 1.　自伝的記憶の機能と年代との関連

代と50歳代の間に有意な差が認められ，20歳代は，40歳代，50歳代より，自伝的記憶の方向づけ機能と自己機能を使用する頻度が高いことが示された。

考察

方向づけ機能と自己機能について，年代別の主効果が有意であり，年代の違いにより自伝的記憶の機能の頻度が異なることが示された。これにより，年代の違いによって自伝的記憶が担う機能が異なるとした予測については支持される結果となった。田上（2009）は，青年期と成人期で方向づけ機能の性質が変化する可能性を示唆したが，本研究でも方向づけ機能の使用について，年代間で差があることが確認された。

しかし，社会機能については，年代別の主効果は有意とならず，年代による差は明らかにならなかった。社会機能は，自伝的記憶が対人関係の形成・維持に役立ち，対人関係やコミュニケーションにプラスに働く機能とされている。たとえば，個人的な経験談は抽象的な情報と考えられるため，より説得力があると見なされやすい。相手との楽しい経験を想起することは，相手との関係を近づける要素であることから，いかなる年代であっても，対人関係を形成したり，維持したり，良好なコミュニケーションを取ることの必要性が変わらないことを考えると，方向づけ機能や自己機能と異なり，社会機能は年代によっての違いが小さいのであろう。

また，自伝的記憶の機能を働かせる頻度を年代別に比較すると，方向づけ機能は20歳代が最も高く，自己機能も20歳代が高かった。Cohen（1998）は，老齢期の人々が記憶を一般化することによって問題解決を図る機能の重要性が薄れ，気分の制御や個人内機能が一層重要となる可能性を示唆している。このことからも，年代が上昇するにつれて“問題解決の機能”に対応する方向づけ機能の重要性が低下し“気分の制御や個人内機能”に対応する自己機能の重要性が高まると予測した。しかし，本研究では，方向づけ機能は20歳代が高く，自己機能についても，20歳代が最も高い結果となった。方向づけ機能については予

測が支持されたが，自己機能の予測については支持されず，予測と逆の結果となった。

本研究では，60歳以上の高齢者を調査対象に含んでいないため，高齢者において重要性が高まると考えられる自己機能について明らかにならなかったことも考えられる。先行研究で示唆された機能の変化が高齢になって突然現れるのではなく，高齢者にいたるまでの20歳から59歳までの間においても，段階的に高まってくると予測した。しかしながらその変化は明らかにならなかった。自己機能については，予測とは逆に，20歳代が最も頻繁に使用している結果となった理由としては，20歳代の半ばまでの時期はアイデンティティの確立期にあたり，自分が何者なのかを繰り返し問いかける時期にあたる（佐藤，2001）ことが影響していると考えられる。また，30歳代から50歳代に向けて増加する，過去を懐かしむ傾向（Kusumi et al., 2010）を予測の根拠としたが，懐かしむ過去は必ずしも自伝的記憶に該当するものばかりではなく，社会的な環境など，さらに広い過去を指しているとも考えられるため，自伝的記憶の機能との結びつきは明確でなかったのであろう。

また，自伝的記憶の機能の使用について，性別による差異は，有意でなかった。Wang & Conway（2004）の指摘にもとづき，自伝的記憶についても男性の方が頻繁にさまざまな機能を使用する可能性を予測したが，男女間の自伝的記憶の機能の違いは明らかにならなかった。

今回の研究では，TALE尺度の有効性の検討，およびTALE尺度を使用して自伝的記憶が担う機能を年代別・性別で比較することにより，年代差・性差が自伝的記憶の機能にどのような影響を与えるかを検討した。本研究では，年代差の影響を検討するうえでは，年齢が20歳から59歳までを対象とした。しかし，今後は60歳以上の高齢者からも求めるなど，さらに広い年齢層を対象とすることが必要である。また，TALE尺度は想起目的に関するメタ記憶を検討する尺度であり，現実の回想行動との対応は確認されていない（佐藤，2008b）。さらに不随意記憶のような記憶の無意識的利用の場合には，質問紙による機能の解明は困難である（神谷，2003，2010）との指摘もある。こうしたことから，現実にどのような状況で過去を振り返るのかについての検討が必要であろう。

また本研究において，国・年齢・職業について，対象を広げた場合にもTALE尺度が使用できる可能性が示唆されたので，日本における同尺度の有効性をさらに検討する必要がある。

引用文献

Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory*, **11**(2), 113-123.

Bluck, S., Alea, N., Habermas, T., & Rubin. D. C. (2005). A tale of three functions: The Self-reported uses of autobiographical memory. *Social Cognition*, **23**, 91-117.

Bluck, S., & Levine, L. J. (1998). Reminiscence as autobiographical memory: A catalyst for reminiscence theory development. *Aging and Society*, **18**, 185-208.

Brewer, W. F. (1986). What is autobiographical memory? In D. C. Rubin (Ed.), *Autobiographical memory*. Cambridge: Cambridge University Press. pp. 25-49.

Cohen, G. (1989). Memory in the real world. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
（川口　潤（訳者代表）（1992）．日常記憶の心理学　サイエンス社）

Cohen, G. (1998). The effects of aging on autobiographical memory, In C. P. Thompson, D., J. Herrmann, D. Bruce, J. D. Read, D. G. Payne & M. P. Toglia (Eds.), Autobiographical memory: Theory and applied perspectives. Hillsdale, N J: Lawrence Erlbaum Associates. p. 121.

Cott, J. (2005). On the sea of memory: A journey from forgetting to remembering. New York, NY: Random House Inc.

（鈴木晶（訳）（2007）．奪われた記憶――記憶と忘却への旅　求龍堂）

Ebbinghaus, H. (1885). MEMORY: A Contribution to Experimental Psychology. (Tras. by H. A. Ruger & C. E. Bussenius), New York: Dover Publications.
（宇津木保（訳）（1978）．記憶について――実験心理学への貢献　誠信書房）

神谷俊次（2003）．不随意記憶の機能に関する考察――想起状況の分析を通じて――　心理学研究，**74**，444-451．
(Kamiya, S. (2003). Some observations on the functions of involuntary memory: An analysis of the circumstances surrounding occurrence. *Japanese Journal of Psychology*, **74**, 444-451.)

神谷俊次（2010）．想起契機からみた不随意記憶の機能に関する研究　アカデミア（南山大学紀要）自然科学・保健体育編，**15**，1-16．
(Kamiya, S. (2010). Function of Involuntary Autobiographical Memories: Examining the Circumstances Surrounding Occurrence. *Journal of the Nanzan Academic Society "ACADEMIA"*, **15**, 1-16.)

Kusumi, T., Matsuda, K., & Sugimori, E. (2010). The effects of aging on nostalgia in consumers' advertisement processing. *Japanese Psychological Research*, **52**, 150-162.

Neisser, U. (1978). Memory: What are important questions? In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes (Eds.), Practical aspects of memory. London, UK: Academic Press. pp. 3-24.

越智啓太（2008）．日常記憶　太田信夫・多鹿秀継（編著）　記憶の生涯発達心理学　北大路書房　pp. 259-270.
(Ochi, K.)

相良陽一郎（2000）．日常記憶　太田信夫・多鹿秀継（編著）　記憶研究の最前線　北大路書房　pp. 151-161.
(Sagara, Y.)

佐藤浩一（2001）．自伝的記憶　森敏明（編）認知心理学を語る第1巻　おもしろ記憶のラボラトリー　北大路書房　pp. 15-36.
(Sato, K.)

佐藤浩一（2008a）．自伝的記憶の構造と機能　風間書房
(Sato, K.)

佐藤浩一（2008b）．自伝的記憶の機能　佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編著）　自伝的記憶の心理学　北大路書房　pp. 60-75.
(Sato, K.)

佐藤浩一（2008c）．まえがき　佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編著）　自伝的記憶の心理学　北大路書房　pp. i-iv.
(Sato, K.)

佐藤浩一（2008d）．自伝的記憶研究の方法と収束的妥当性　佐藤浩一・越智啓太・下島裕美（編著）　自伝的記憶の心理学　北大路書房　pp. 2-18.
(Sato, K.)

田上恭子（2009）．青年期と成人期における自伝的記憶の方向づけ機能に関する予備的研究　弘前大学教育学部紀要，**101**，151-156．
(Tagami, K. (2009). Directive functions of autobiographical memory in adolescents and adults: A preliminary study. *Bulletin of the Faculty of Education of Hirosaki University*, **101**, 151-156.)

Wang, Q., & Conway, M. A. (2004). The Stories We Keep: Autobiographical Memory in American and Chinese Middle-Aged Adults. *Journal of Personality*, **72**(5), 911-938.

Webster, J. D., & McCall, M. E. (1999). Reminiscence Functions Across Adulthood: A Replication and Extension. *Journal of Adult Development*, **6**(1), 73-85.

―― 2012. 9. 19 受稿，2012. 12. 7 受理 ――